

TOKKO —特攻—

2007(平成19)年7月20日鑑賞(松竹試写室)

★★★★



監督・プロデューサー＝リサ・モリモト／プロデューサー・構成＝リンダ・ホーランド／元特攻隊員＝江名武彦(予備学14期、偵察、百里原空)、浜園重義(丙飛11期、操縦、百里原空)、中島一雄(乙飛18期、偵察、百里原空)、上島武雄(予備学14期、操縦、百里原空)、／駆逐艦ドレックスラーの生存者＝ユージン・ブリック、ヘンリー・クリスチャンセン、ジョー・ハース、フレッド・ミッチェル、デューク・ペイン／リサの親戚たち／大貫恵美子、森本忠夫、ジョン・ダワー、日高恒太郎(シネカノン配給／2007年アメリカ、日本映画／89分)

……まずは映画のタイトルが、英語＋日本語となっていることに注目！ それは、自分の叔父が特攻隊員だったことを知った日系2世の女性が、2つの国の目を通して見ているため。次に、特攻隊の生き残りの、浜園・中島チームのアツと驚く本音の証言にも大注目！ 今年の夏は、『ひめゆり』(06年)、『ヒロシマナガサキ』(07年)とともにナナゲイで連続公開される、太平洋戦争の悲劇を現代に問うドキュメンタリー映画3作に注目し、是非十三まで出かけて行ってほしいものだが……。

第5章

これこそ本当のおススメ！

なぜ英語＋日本語のタイトルに……？

最近日本語の言葉をわざわざローマ字で書くことが多いから、この映画のタイトルをみて、そんな最近の流行を追った映画かなと一瞬思ったが、実はこれはれっきとしたドキュメンタリー映画。そこで調べてみると、監督でありプロデューサーであるリサ・モリモトは、日系アメリカ人2世として1967年にニューヨークで生まれた女性。したがって今ちょうど40歳。そして何と彼女の亡き叔父が特攻隊員としての訓練を受け、戦後それを家族を含む誰にも語らなかったことを知って衝撃を受け、その取材をするべく日本を訪れることに。

したがってこの映画は、日系2世の彼女にとってはあの戦争における特攻というものの本質を取材し、ドキュメンタリー映画を製作することによって自分自身のルーツ

をたどるもの……？ そしてまた、この映画が『TOKKO 一特攻一』と英語+日本語のタイトルとなっているのは、そんな2つの国の目をもった彼女がこのドキュメンタリー映画をつくったためだ。

そのため、この映画では4人の特攻隊員の生き残りがメインとして語っているが、アメリカ側も駆逐艦ドレックスラーの生存者たちが実に生々しい証言をしている。さらにこの映画は、英語タイトルが付けられており、アメリカでの上映を前提としているため、リンダ・ホーランド氏による英語の字幕つきというのが大きな特徴。

ヤン・ヨンヒ 梁英姫監督 vs. リサ・モリモト監督……？

『ディア・ピョンヤン』(05年)は、在日2世のヤン・ヨンヒ梁英姫監督が朝鮮総連の幹部として長年大阪で働いてきた自分の父親の姿を描き、北朝鮮の生々しい姿を伝えたドキュメンタリー映画で、よくぞここまでカメラを回せたものと感心した映画(『シネマルム12』392頁参照)。したがってこの映画の価値は、ヤン・ヨンヒ梁英姫監督の目を通した北朝鮮の実態をありのままに日本人に対して伝えたこと。

そう考えると、日系アメリカ人のリサ・モリモト監督が、アメリカではイスラム教徒の自爆テロと同じように考えられているかもしれない「KAMIKAZE」の実態を、リサ・モリモト監督の目を通して「TOKKO」としてありのままに伝えていくことは、大きな意義があるはず。リサ・モリモト監督は小さい頃日本で過ごした時の叔父さんの記憶があるうえ、同志社大学でも学んだ経験があるため、日本語はきちんと話せるが、どちらかというともメンタルはアメリカ人……？

日本では神風特攻隊を描いた映画は、高倉健主演の『ホタル』(01年)や今年公開された石原慎太郎東京都知事の製作総指揮にかかる『俺は、君のためにこそ死ににいく』(06年)をはじめとしてたくさんあるが、これらをアメリカでアメリカ人が観ることはまず考えられないもの。したがって、リサ・モリモト監督による英語字幕つきのこのドキュメンタリー映画については、日本での一定の観客動員を期待するとともに、どちらかというともアメリカでどの程度上映され注目されるかに注目したい。

来たる7月29日の参院選挙は安倍自民党に対して厳しい予測が出されているが、仮に与党が過半数割れしても安倍政権が維持できるのであれば、是非安倍総理には個人として、この映画がアメリカで広く上映されることへの期待と支援を表明してもらいたいものだが……。

エンジンの故障は、どんな運命を……？

『俺は、君のためにこそ死ににいく』では、出撃しては機の故障のため何度も引き返してくるため、「卑怯者」の烙印を押されてしまった荒木隊の田端紘一少尉の悲劇が描かれていた。また、突入前の敵機との銃撃戦で傷つき島に不時着した中西隊の隊長中西正也少尉は、結局ケガのため生き残ることになった。

このドキュメンタリー映画では、それとよく似た体験をもつ江名武彦の証言が注目される。すなわち、江名は2度もエンジンの故障に見舞われた。2度目に出撃した5月11日も日本本土から75km南の黒島沖に不時着し、ケガのため意識不明に。そして約80日後の7月29日に日本の潜水艦に救出され、結局生き延びることに。そして、所属基地へ車で戻る途中の8月7日、その前日の原爆で廃墟と化した広島のまちをさまよったとのこと。

エンジンの故障が生んだこんな数奇な運命をどう考えればいいのか……？

浜園・中島チームのユニークな証言にビックリ！

日系2世監督ならではのユニークな証言をとったのが、浜園・中島チーム。浜園が操縦し、中島が機関銃の射手を務めた浜園・中島チームは、敵艦隊まであと数分というところで、3機の敵戦闘機の攻撃を受けたため、爆弾を捨てて35分間にわたって空中戦を展開したとのこと。敵の銃弾切れか何かの奇蹟的な状況によってその攻撃をかわした浜園・中島チームは、何と「もう帰ろうぜ」という会話を交わして帰還中、林に墜落して重傷を負ったとのこと。この2人は率直に自分の気持を表明しており、とりわけ中島は、ボロボロになった機で帰投する途中、沖縄に向かう陸軍特攻隊と遭遇した際、「引き返せ！ どのみち標的まではたどりつけやしないんだ！」と彼らに伝える手段はないものかと思ったと証言しているからすごい。また操縦していた浜園は、あの時敵の戦闘機があえて自分の機を撃たなかったと信じており、今もその米軍パイロットに会いたいと探しているとのこと。彼らの証言を聞き、他の特攻隊の生き残りの人はひょっとして眉をひそめるかもしれないが、実はこれが人間の本音の本音の部分ではないだろうか。これは日系2世の女性監督だからできた功績かも……？



© Edgewood Pictures, Inc.

上島の英語にもビックリ！

もう1人上島武雄は、順番待ちで特攻の訓練を続けていた状態で終戦を迎えたため、結局1度も出撃しなかったが、彼がさまざまな思いを語っている中、突然流暢な英語でしゃべり始めたのにビックリ。これは、彼が戦後は日本に進駐する米軍の話す英語を学び、ヨーロッパからオーディオ機器を輸入するビジネスで成功を収めているためだが、20歳の時学徒出陣で海軍予備学生として徴兵されたエリートだけにさすがと言うべきか……。

アニメ的な映像の賛否は……？

この映画は特攻隊を伝えるドキュメンタリー映画だから、当時のニュース映像と関係者の証言を織りまぜながら映像を構成し、そこにナレーションや効果音を適切にはめ込んでいくというオーソドックスな手法をとっている。しかし、ひとつ「あれっ」と思ったのは、日米の力関係をわかりやすく解説するため地図上に効果的な矢印を使ったり、銃撃戦の様子をわかりやすく解説するためアニメ的な映像を使ったりしているところ。こういう工夫によって、たしかにわかりやすくなっているのだが、反面マンガ的になり、リアルさが失われるから、古いタイプの日本人には反発があるかも、

とつい思ってしまったが……？

関大尉の言葉を今どのように……？

特攻作戦によって死んでいった若者は約4000人といわれている。他方、それによるアメリカ艦船の被害は撃沈34隻、損傷288隻といわれている。しかし特攻作戦の初期の段階はともかく、1945年3月の沖縄戦あたりになると、アメリカ艦船の対空砲射能力の充実によって10機のうち9機は突入前に撃ち落とされ、残りの1機も艦船の目標地点に突入できる確率はかなり低いものだったはず。したがってそのほとんどは犬死に同様で、まさに死に場所を求めるために特攻機に乗っていったようなもの……？

そんなことを考えると、1944年10月のレイテ沖海戦においてはじめて組織的な特攻作戦を指揮し、見事に敵空母に突入したと言われている「神風特別攻撃隊」の敷島隊を指揮した関行男大尉が「自分のようなベテラン・パイロットを殺すようでは、もう日本もおしまいだ。しかし自分は国のためではなく、愛する妻を守るために死ぬのだ」と語っている言葉は印象深い。

この映画の中で中島氏が「せめてあと半年早く日本が降伏していれば……」と率直に語っていたことも印象的だが、特攻作戦の生みの親と言われている大西瀧治郎中将を含む日本の上層部が、もう少し冷静かつ客観的に情勢を把握する能力をもっていたら、と私などはつい考えてしまうのだが……。

米駆逐艦の生存者たちの証言は……？

私は従来から特攻による成果についてあまり自信をもてなかったが、この映画に登場する米駆逐艦ドレックスラーの生存者たちの証言を聞くと、その成果の甚大さにビックリする。すなわち、駆逐艦ドレックスラーは2機の特攻機の突入によって、アックという間に沈没してしまったということだ。彼らが生き残ることができたのは、全くの偶然あるいはとにかく泳いだことによるものらしい……。

彼らが、日本の若者たちによる無謀な特攻に対してどのような価値観をもっているのか、またそれによって多くの同僚の乗組員が犠牲となったことについてどのように考えているのかは、彼らの証言を聞けばよくわかるから、是非それにも耳を傾けてもらいたいものだ。

🎬 ナナゲイに大きな拍手を！

十三にあるナナゲイこと第七藝術劇場は、終戦記念日である8月15日の前後において「今こそ、太平洋戦争の悲劇を現代に問う!!」と銘打って『ひめゆり』(06年)、『ヒロシマナガサキ』(07年)、『TOKKO 一特攻一』というドキュメンタリー映画3作を連続上映することに。昔は、東宝がこの時期に『日本のいちばん長い日』(67年)などの戦争大作を上映していたが、今は東宝もそんな路線から遠く離れて人気テレビドラマの劇場版製作にウエイトをおき、収益重視路線一辺倒……？ 映画づくりも商売だから、儲けなければならないことはわかるが、やはりどんな映画をつくりたいか、見せたいかという姿勢も大切。

その点、ナナゲイがこんな問題提起作3作を連続上映するという企画をたてたのは立派なもので大きな拍手を送りたい。

願わくば、この私の評論が1つの参考となって、この企画でナナゲイの収益が多少なりとも向上してもらいたいものだが……。

2007(平成19)年7月21日記

ミニコラム

こだわりの映画館に拍手！

07年の夏、『ひめゆり』『ヒロシマナガサキ』『TOKKO 一特攻一』の3本を「今こそ、太平洋戦争の悲劇を現代に問う!!」と銘打って特集したのは、大阪のナナゲイこと第七藝術劇場。この支配人松村厚氏はいかにも映画好きのおじさんで、映画を語れば底なしで楽しそう。しかし、上映作品のラインナップと映画館の経営にはいつも苦労している様子。そりゃシネコンと同じ

作品では競争に勝てるはずはないし、逆にあまりに凝った作品になると宣伝力がないから誰も客がこないことになる。ところが、07年夏の特集は彼も意外なほど大人気だったため、経営的にも大喜び。それを聞くと、日本もまだまだ捨てたもんじゃないナと思ったが……。こだわりの映画館に拍手！

2007(平成19)11月22日

第5章

これこそ本当のおススメ！